

付編1 伊予市上三谷猿ヶ谷古墳群採集の呉鏡とその歴史的意義

岩本 崇(島根大学)

1 猿ヶ谷鏡の特徴

愛媛県伊予市上三谷に所在する猿ヶ谷古墳群では、鏡の破片が採集されている。破片は接合する2片であり、鈕を除くおおよその文様構成を把握できる(図1)。鏡の主題が表現される内区主文部には神獣像が主像として配される。くわしくみると、破片の中央に時計回り方向に頭を向ける獣像があり、その左側に雲氣状の表現と顔面のみの獣の表現がある。また、破片中央の獣像の右側には神仙とおぼしき図像が体をやや右側に向ける姿態をとる。この神仙は向かい合う複像配置をとるものとみられる。こうした特徴から、猿ヶ谷鏡は対置式神獣鏡であると判断しうる。そして、内区主文部と圈線によって画された内区外周部には半円方形帶がめぐる。半円形と方格の文様や銘文は不明である。おそらく細線表現による文様や文字であったため、不鮮明な状態になつたのであろう。内外区を画するのは頂部に凹線をいれた断面三角形の界圈であり、界圈の内斜面に鋸歯文がほどこされる。鋸歯文は非常に細長い表現である。外区は凹帶と幅の狭い素文(無文)の平縁からなる。現状では確認できないが、類例から凹帶には銘文が配されたと推定されることから、猿ヶ谷鏡は銘帶対置式神獣鏡とみてさしつかえないであろう。

鏡背面の状態は表面にヒダやシワ状の細かな凹凸をとどめており、仕上げの研磨はほとんどほどこされない。微細な凹凸の存在から、不鮮明な表面状態は摩滅など二次的な変形だけではなく、鋳造不良による影響も大きく受けているものと判断できる。縁端面は残存部位が少ないながら、研磨条痕はみられず、平滑な状態を呈する。鏡面も研磨によって平滑に仕上げられる。

2 猿ヶ谷鏡の製作系譜と年代

銘帶対置式神獣鏡は、「会稽所作」「会稽師鮑」といった銘文から会稽郡において製作された鏡、すなわち江南の鏡であることがわかる(上野2007)。さらに、銘帶対置式神獣鏡には年号鏡が多い。そこで、それらを手がかりに猿ヶ谷鏡の年代を検討しておきたい(e.g.岡村2013)。

銘帶対置式神獣鏡の年号鏡は後漢・建安年間すなわち建安二十一年(216)を嚆矢とし、220年代以降の後漢・延康年間、呉・黃初~黃武年間は外区に連渦文や唐草文を配する例が主体をなし(図2-1・2)、230年代を中心とする黃龍ならびに嘉興年間に外区素文の例が確認されるようになる(図2-3)。そして、



図1 猿ヶ谷古墳群採集の鏡

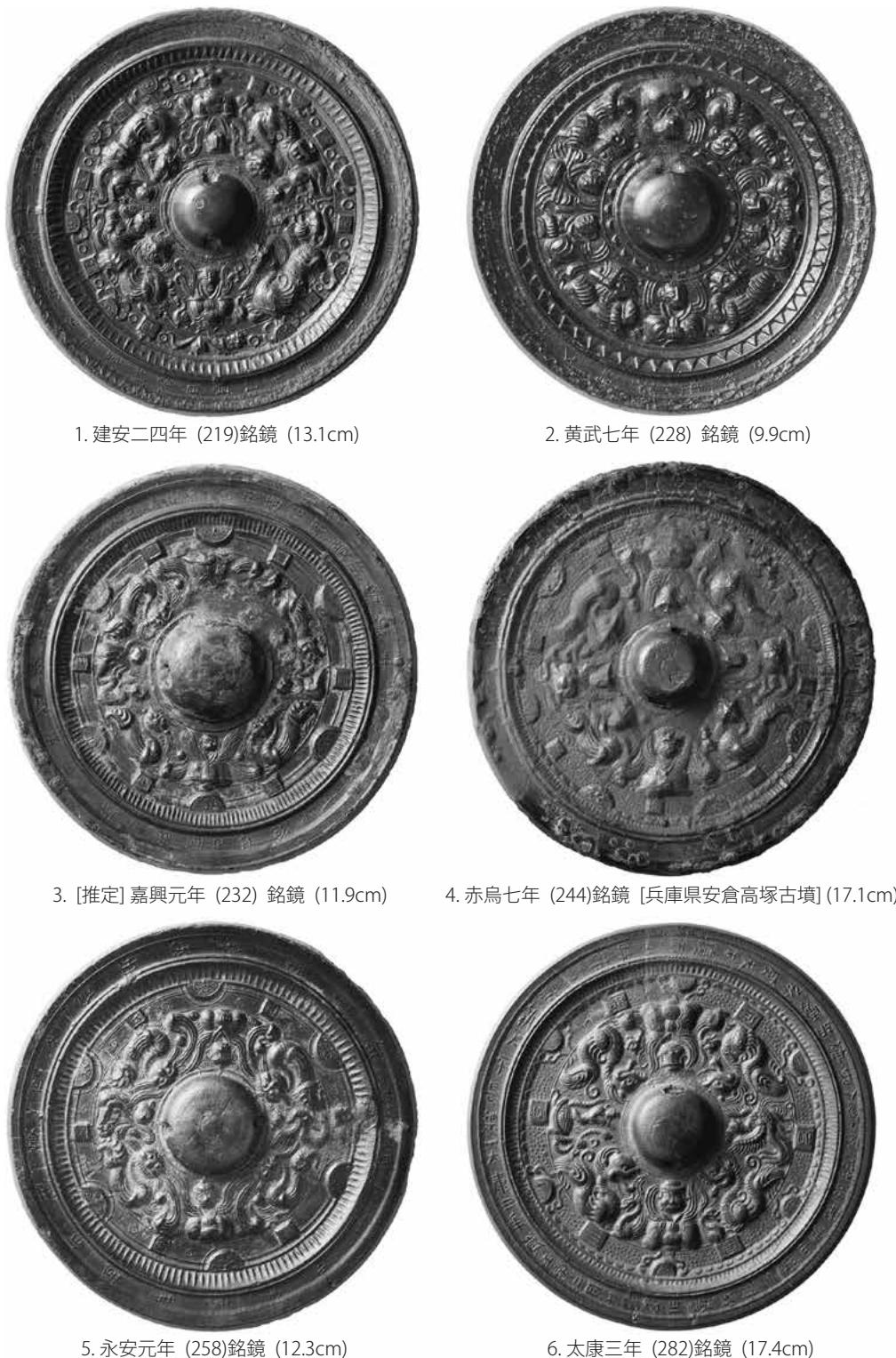


図2 銘帶対置式神獸鏡の変遷(縮尺不同)

230年代末の赤鳥年間以降は外区が基本的には素文化し、外区の凹帯幅が広く縁部幅が狭いものとなる(図2-4)。この段階までは主像表現は多様であり、これ以降に神像は単像配置が主体をなすようになる。年号鏡をみる限り、赤鳥七年(244)鏡につぐのは建興二年(253)鏡となり、わずかながら断絶も想定される。その後は、主像とくに獸像顔面の両側から長く伸びる髭状の特徴的な表現の多用、主像への鳳文の採用などが顕著となり、類型化と変容が進む(図2-5・6)。猿ヶ谷鏡は主像の複像配置をとること、外区が素文化しかつ縁部幅が狭いこと、獸像顔面に髭状に長く伸びる雲気がないことから、黃龍年間(229-231)から赤鳥七年(244)ごろまでの製作である可能性が高い。

以上のように、猿ヶ谷鏡についてはおおまかながら3世紀第2四半期ごろに、江南すなわち呉において製作された銘帶対置式神獸鏡と考えられる。

3 古墳出土の江南の鏡

日本列島の古墳から出土する江南の鏡は少ない(車崎2003、森下2021)。西晋鏡とされる鏡も古墳出土例は、魏鏡の特徴をひきつぐ華北系鏡群が圧倒的に多い。では、古墳出土の三国晋鏡の主体が華北の鏡であるとして、なぜ江南の鏡が少数ながらも日本列島にもたらされているのか。この点を考える前題作業として、古墳から出土する江南の鏡を概観する。

まず、2世紀後半に降るものとみられる画象鏡として、内区幅が広い点から呉郡系と推定される例があり(e.g.上野2001)、京都府岩滝丸山古墳から出土している(図3-1)。華北東部系が主体をなす古墳出土画象鏡にあって、岩滝丸山鏡は唯一の江南の鏡となる。同様に、2世紀後半ごろと推定される江南系の鏡には八鳳鏡がある。古墳出土鏡としては、京都府上大谷6号墳と長崎県上県大将塚古墳の各例が隅丸方形鉢座と外区凹帯をもつ点から(図3-2)、江南系に属するものとみられる(e.g.岡村2012)。江南系の八鳳鏡はやはり数が少ない(註1)。

神獸鏡としては、2世紀末から3世紀初頭に比定しうる画文帶対置式神獸鏡が京都府椿井大塚山古墳から出土している(e.g.岡村2013)。椿井大塚山鏡は「九子」銘をもち(図3-3)、類品に「呉造明鏡」「呉郡趙忠所作」といった銘をもつ例があり、呉郡を中心に製作された鏡群であると推察される(森下2016a)。また、兵庫県夢野丸山古墳の重列式神獸鏡は、長方形枠の額銘がないことから建安二十二年(217)以降、かつ外区に連渦文をもつことから呉の黃龍年間(230)ごろまでの製作と考えられ、やはり呉郡系に位置づけられる。

つづいて、ほぼ確実に3世紀第2四半期以降に比定される鏡、いわゆる呉鏡をとりあげる。

八鳳鏡のなかでも隅丸方形鉢座で、かつ外区の連弧文に文様を配した例があり、それらは呉前期の年代が想定される(秋山1998)。岡山県七つ塙古墳例がこれに該当するものとみられる。また、宝珠形鉢座と素文の平縁をもち、外区連弧文に文様を配した型式は赤鳥十二年(249)に被葬者が没した安徽省馬鞍山朱然墓から出土しており、3世紀第2四半期の製作が想定される(秋山1998)。この型式に該当する例が兵庫県奥山大塚古墳より出土している。

猿ヶ谷鏡を含む銘帶対置式神獸鏡には古墳出土例が5例ある。愛媛県猿ヶ谷古墳群、岡山県庚申山古墳(図3-4)、兵庫県安倉高塚古墳、京都府上狛古墳、山梨県鳥居原狐塚古墳である。さらに、



1. 京都府岩滝丸山古墳 画像鏡 (21.3cm)



2. 京都府上大谷 6号墳 八鳳鏡 (11.3cm)



3. 京都府椿井大塚山古墳 画文帶対置式神獸鏡 (13.8cm)



4. 岡山県庚申山古墳 銘帯対置式神獸鏡 (11.8cm)



5. 広島県尾ノ上古墳 八鳳鏡 (22.0cm)



6. 愛媛県天山 1号墳 環状乳神獸鏡 (19.2cm)

図3 古墳出土の江南の鏡(縮尺不同)

銘帯ではなく波文帯となるが、関連鏡が群馬県岩鼻二子山古墳から出土している。このうち鳥居原狐塚鏡が赤鳥元年(238)、安倉高塚鏡が赤鳥七年(244)の紀年銘をもつ。上狛鏡ならびに鳥居原狐塚鏡は、猿ヶ谷鏡と共に特徴を有し、3世紀第2四半期ごろの製作と推定される。大ぶりの鉢が特徴的な庚申山鏡は黄龍元年(229)と推定される鏡(大谷大学博物館所蔵)と神獣像表現や文様構成が共通しており、近い時期の所産であろう(註2)。

さらに、呉を併合して以降の西晋代に比定される鏡も、古墳出土鏡に少数ながら存在する。八鳳鏡において宝珠形鉢座をもち、文様が面表現から線・立体表現になった一群は当該期に位置づけられる(秋山1998)。福岡県沖ノ島17号遺跡、同18号遺跡、福岡県宮地嶽付近古墳(伝)、広島県尾ノ上古墳に例がある(図3-5)。あるいは鳳文が立体表現という点で八鳳鏡と共通性がみられる、愛媛県安養寺裏山古墳から出土した方格T字鳳文鏡も西晋代の呉郡系の鏡と考えられる。また、福井県泰遠寺山古墳と愛媛県天山1号墳から出土した環状乳神獣鏡は、銘文に「休兵息吏晋世寧」とあり(図3-6)、晋世寧が太康年間(280-291)に流行した歌舞であることから、その製作年代を特定できる鏡である(王1989)。

4 呉鏡の流入背景と歴史的意義

以上に述べたように呉鏡を中心とする江南の鏡は古墳出土鏡の全体からするとごく少数ではあるが、確実に日本列島にもたらされた点が重要である。そして、江南の鏡の主体をなすのは3世紀第2四半期ごろの呉鏡である点は、日本列島出土の華北系鏡群にみる時期の傾向ともおおよそ符合する。三角縁神獣鏡においても3世紀第2四半期ごろの製品がその全体に占める割合は高い(岩本2019)。ただし、古墳出土の魏鏡には3世紀第3四半期ごろに比定される方格規矩鏡や方格T字文鏡をはじめ、細線式獣帶鏡、鳥文鏡、唐草文鏡などが一定数みられるが(岩本2020)、呉鏡にはその時期の例を確認することができない。数は相対的に減少するが、三角縁神獣鏡にも3世紀第3四半期ごろの製品は確実に存在する。そうした魏鏡と呉鏡の出土傾向が有意であるならば、列島出土の呉鏡が3世紀第2四半期ごろにほぼ限定されるのは、魏鏡とは異なる背景によってもたらされたからであろう。

くわえて、呉鏡も魏鏡も楽浪での出土がみられないことは無視できない(森下2007, 2016bなど)。3世紀第1四半期までの鏡が楽浪で見出されている点を考慮すれば、呉鏡や魏鏡についてはそれまでとは異なって楽浪を介することなく、それぞれ直接的に流入するルートや方法が確立していた公算が高い。このように、猿ヶ谷古墳群で採集された呉の銘帯対置式神獣鏡は、史書に記録されることのなかった呉と倭の交渉を物語る確かな物証ととらえることが可能なのである。

註

(1) 古墳出土の後漢後期に比定される八鳳鏡は、現在21例が確認されている。そのなかで江南の八鳳鏡は2例ということになる。

(2) このほか、奈良県新山古墳の画文帶同向式神獸鏡(官65)、奈良県黒塚古墳の同向式神獸鏡、京都府百々ヶ池古墳の画文帶同向式神獸鏡、福井県西谷山2号墳の同向式神獸鏡は呉鏡の可能性が指摘される(車崎2003:182)。また、三重県塚越1号墳の画文帶対置式神獸鏡も呉鏡の可能性がある。ただし、これらは文様表現・構成のくずれ以上に明確な根拠がないため、その製作系譜の確定は今後の課題である。ほかに、奈良県大和天神山古墳や古市方形墳、大阪府石切剣箭神社古墳・兵庫県白水瓢塚古墳、岐阜県円満寺山古墳、広島県鍛冶屋迫4号墳、奈良県ホケノ山古墳などの画文帶求心式神獸鏡も呉鏡との指摘がある(車崎2008:105)。これらについては、型式学的な連続性や七言句で構成される銘文の内容から、画文帶同向式神獸鏡や斜縁神獸鏡と関連づけられるため、華北東部における製作を想定するのが妥当であろう(上野2008)。

引用文献

- 秋山進午1998「夔鳳鏡について」『考古学雑誌』84(1) 日本考古学会 pp.1-26
- 岩本崇2019「三角縁神獸鏡生産の展開と製作背景」『銅鏡から読み解く2~4世紀の東アジア』アジア遊学237 勉誠出版 pp.126-147
- 岩本崇2020『三角縁神獸鏡と古墳時代の社会』六一書房
- 上野祥史2001「画像鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』86(2) 日本考古学会 pp.97-135
- 上野祥史2007「3世紀の神獸鏡生産—画文帶神獸鏡と銘文帶神獸鏡—」『中国考古学』7 日本中国考古学会 pp.189-215
- 上野祥史2008「ホケノ山古墳と画文帶神獸鏡」『ホケノ山古墳の研究』権原考古学研究所研究成果第10冊 奈良県立権原考古学研究所 pp.255-261
- 王仲殊1989「論日本出土の呉鏡」『考古』1989年2期 科学出版社 pp.161-177
- 岡村秀典2012「後漢鏡における淮派と呉派」『東方學報』87 京都大学人文科学研究所 pp.1-41
- 岡村秀典2013「漢三国西晋時代の紀年鏡—作鏡者からみた神獸鏡の系譜—」『東方學報』88 京都大学人文科学研究所 pp.1-72
- 車崎正彦2003「三国鏡・三角縁神獸鏡」『考古資料大観』5 弥生・古墳時代 鏡 小学館 pp.181-188
- 車崎正彦2008「三角縁神獸鏡の年代と古墳出現の年代」『史観』159 早稲田大学史学会 pp.92-112
- 森下章司2007「銅鏡生産と変容と交流」『考古学研究』54(2) 考古学研究会 pp.34-49
- 森下章司2016a『五斗米道の成立・展開・信仰内容の考古学的研究』平成24~27年度科学研究費助成事業 基盤研究(B)研究成果報告書 大手前大学総合文化学部
- 森下章司2016b『古墳の古代史—東アジアのなかの日本』ちくま新書 筑摩書房
- 森下章司2021「古墳出土鏡研究の展開」『季刊考古学』153 雄山閣 pp.97-104

挿図出典

図1: 猿ヶ谷古墳群採集(伊予市教育委員会蔵)。図2: 1. 建安二四年銘鏡(五島美術館蔵[M10])、2. 黄武七年銘鏡(五島美術館蔵[M15])、3. 推定・嘉興元年銘鏡(大谷大学博物館蔵)、4. 安倉高塚古墳(兵庫県教育委員会蔵)、5. 永安元年銘鏡(五島美術館蔵[M21])、6. 太康三年銘鏡(五島美術館蔵[M31])。図3: 1. 岩滝丸山古墳(妙正寺蔵)、2. 上大谷6号墳(城陽市教育委員会蔵)、3. 椿井大塚山古墳(京都大学総合博物館蔵)、4. 庚申山古墳(岡山シティミュージアム蔵)、5. 尾ノ上古墳(福山市教育委員会蔵)、6. 天山1号墳(松山市考古館蔵)。